



Title	想いのままに
Author(s)	遠藤, 齊彦
Citation	大阪公衆衛生. 1980, 43, p. 10-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84028
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

想いのままに

(財) 大阪防疫協会理事
遠藤 斉彦

見わたせば花も、もみぢもなかりけり
浦の苫屋の秋の夕ぐれ

「新古今集 第四」

これは、有名な三夕の歌の一首であるが、この歌に「花ももみぢも」とあるのは、「春の桜の花の美しいながめも、秋の紅葉のすばらしい景色も」の意味で、人の心を魅了する自然の最高の美、四季を代表する美を「花」と「もみぢ」とで象徴していることはいうまでもない。

古来春がよいか、秋が好きかの論は、記紀「万葉集」からはじまり、「源氏物語」など日本を代表する古典文学にその趣向論争が多い。

人口に膾炙^{かいしや}している小倉一首の中に、「花」という名詞は六首にあるが、桜の花をいうのは四首、あとは梅の花が一首、菊の花が一首であり、花以外に「桜」一首「山桜」一首があるが「山桜」は花とおなじ歌に詠まれているので「花」「桜」「山桜」は計五首ということになる。

これに対して「紅葉葉（もみじは）」「紅葉」では五首で数において、桜の花と同じである。

動詞「もみづ」が、上代では、「もみつ」と澄んでよみ、活用も四段であったが、平安時代からは「つ」が濁り、活用も上二段活用になったこと、また「もみづ」は秋の末などに草木の葉の色が赤・茶・あるいは黄などに変ることを述べる動詞であったことは、周知のとおりである。

また樹木の場合は、一般にかえで科の落葉

喬木については、「源氏物語」「宿木」「枕草子」には「つた」についてのべている例もある。ただし紅葉したとき「楓」となるがもとは「かえるで」といった。その形が蛙の手に似ているからである。「万葉集巻四にて子持山若可徹流氏（わかえるで）のもみつまで」という表記がある。もっとも美しいから「紅葉」といえば楓の葉の紅葉をいうようになったことをご存じのことである。

ことばの詮議めいたことは、この位にして一年ごとに枯れて死んでゆく葉がその「老い」の姿を紅葉・黄葉などのうつくしい色で飾って見せ、やがて落葉してゆくのは、諸行無常の相である。

しかしわれわれは、その美を愛でる。植物だけこの「老い」の美しさ「もみぢ」を、わたくしはうらやましく思いつつ、まことにすばらしいと思うのである。おわりに津守健治氏の秋の旅の一部を紹介する。

紅葉散り敷く頃ともなれば

ひとときなりと生き苦しい世間を離れ

あの町中　あの雑踏　あの車

あの持場　あの歌を忘れ

古都の風情ただよう小道を

ひとりで　または友と

散策してみたいと誰しも思わずにはいまい

そしてわたしもそのひとり

見てごらん　錦の紅葉を

木洩れ陽は白金の光彩を散りばめ

木木は黄金の光りを散りばめ

空気はなにか　気のような艶をにじませ

人知れず貴族の微笑がもれてくる

やはり京都だ

千年前皇族や貴族が　この道を通ったのだ

最後に会の発展と皆様のご健康をお祈り申し上げます。

(協会・特別会員)